

桑名別院を支える人々④

桑名別院報恩講炊事係

桑名組晴雲寺門徒

牧野行良さん(七十四歳)

お斎とき

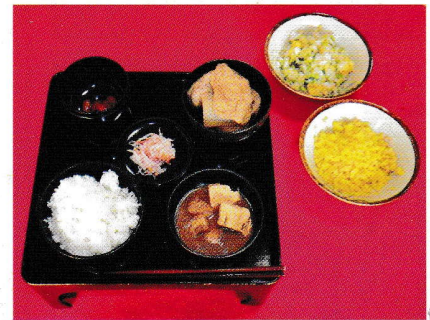
報恩講の炊事係を代表して、牧野さんにお話を伺った。

牧野さん(川越町亀須)は、七年前から別院報恩講のお斎作りに参加しておられる。現在は、伊藤勝美さん(桑名市小貝須)と寺本忠雄さん(桑名市和泉)の三人で食材の注文をしたり、役割を振り分けたりされている。



炊事は、別院婦

人会のみなさんや近郊地区からお手伝いに来てくださる方々が加わり、三十人から四十人ほどで行われている。昨年は、初日二八七食、二日目二九五食、三日目三八九食、四日目五八七食、合計一五五八食を要した。手順は、前日に、蓮根・大根・里芋などの材料を翌日必要数分、切った下炊きしたりする。食数の予測は至難の業で、団体参拝の予定や気象情報を参考に決めていく。当日は、朝六時頃から味付け煮炊きを始め、八時からお手伝いの人が加わり、十時半に始まるお斎に備える。一度に食事ができる人数はせいぜい八十人。配膳して給仕して片付けて、食器を洗って再び配膳。参拝者が多い時の炊事場は騒然とした雰囲気になる。



昔から報恩講のお斎は、近隣地区のご門徒が担当している。煮物は〇〇地区、味噌汁は〇〇地区、なますは〇〇地区といった具合に継承されてきた。しかし、近年、経緯は分からないがお顔を拝見できない地区があり、分担を変えて切盛りしている。地区の減少は、別院職員も含め関係者で話し合っている深刻な問題で、お斎の歴史を継承できるようにしたい。報恩講のお手伝いは奉仕作業であり、「今の時代にそんなことなあ」と言う人もいる。確かに疲れるが、みなさんとの出遇い・発見・驚きなど言い表せない喜びがあることを周知したい。

牧野さんが住む亀須地区では、「今年も頼むな」と声をかけ、集まってもらっている。お寺のことなので、みんなの心はあるはずだから、上手くその心を引き出せるよう各地区で尽力してもらえないかと思う。

この記事を讀まれて「我がこそは」「我が地区こそは」と思われた方、是非、桑名別院へご一報をお願いします。



▲桑名別院報恩講炊事係のみなさん

(桑名別院

〇五九四一三二一〇六五二)